

わかった！できた！



令和2年3月10日 No.7

○「学力フォローアップ校事業」第6回校内研修がありました。

令和2年1月23日（木）に第6回目の校内研修がありました。

今回は、1年1組で算数科「おなじかずつつ」の授業を通して、児童が「わかった・できた」を実感できる授業づくりについて、研究協議を行いました。今回からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを重点に置き、研修を進めました。研修で得た成果や課題をこれからの取組に生かしていきたいと思います。

研究協議（○成果 ●改善点）

今回は、研究授業を「導入」「展開」「終末」の3つの場面に分け、協議グループごとに手立ての有効性について協議しました。

<導入>

○実物模型、劇化することで意欲的に授業に取り組めた。

○問題文の「つつ」を隠した提示をしたことで、「いくつつ」を意識付けることができた。

○問題把握をする際、児童の言葉で説明させたので、理解しやすかった。

●3人ならお皿が3枚ということの確認があるとよかった。

● $2+2+2$ の式の説明。「2が3個」という説明があるとよかった。

●問題文を読むときに、数値の意味をしっかりと理解させて立式する必要があった。

●簡単な図示の仕方を教えておくとうよかった。

<展開>

○プリントは裏返すとお皿の図がかいてあり、すぐに使えたので良かった。

●ペアトークの際、問題文の場面のイメージができていなかった。

●2回目のペアトークのとき、十分な時間が確保できていなかった。

●問題をイメージしにくかったようなので、ブロックを使えるようにさせたらよかった。

●ワークシートの上にブロックをおくという動作化を個人でさせるとより理解が深まった。

●適用問題にもお皿の絵があるとよかった。

<終末>

●まとめの言葉が1年生には難しかった。

●導入で「ずるい」「全員3こずつ」などつぶやきがたくさん出ていたので、導入で出てきた言葉をはじめに板書に残しておき、その言葉を使ってまとめると、児童に落ちたのではないか。

●子供が書いたものが黒板に残っていると、支援の必要な児童が参考にすることができた。

●電子黒板で説明させると、その時はよく分かるが、後には残らないので工夫が必要。

今年度の取組の振り返りと来年度に向けて

【今年度の取組の振り返り】

＜低学年＞

- ・つますきのある児童が要因分析を行い、手立てを考えることで対象児童がいきいきと学習するようになった。
- ・対象以外の課題のある児童も、学習に参加できるようになった。

＜中学年＞

- ・4月の学習規律の徹底が大事である。（あいさつ、鉛筆の用意など）
- ・学力フォローアップの放課後学習指導も、はじめに規律を徹底し、自分で目標を決めることで、自主的に学習に取り組めるようになった。
- ・学習のゴールを示すことで、児童がここまでがんばるといいという見通しがもてるようになった。
- ・めあてを見て、ふりかえりがかけるようになった。

＜高学年＞

- ・いいものはすぐ取り入れて実践するという充実した研修になっている。
- ・全員で要因分析することで、児童理解が深まった。
- ・マンネリ化する研修ではなく、毎回新しい研修の形になっている。
- ・＜導入＞＜展開＞＜終末＞に分けて対象の児童を見とり、話し合う研修の形はよかった。

【来年度へ向けて】

- ・語彙力を高める指導が必要である。
- ・規律面も必要だが、導入の工夫が大事である。
- ・集団思考の場を高めることが必要である。
- ・ほかの先生の授業を見ることで、授業力アップになるので、人の授業を見れるような体制ができればよい。

指導助言（広島県教育委員会義務教育指導課 舞 慎一 指導主事）

＜授業について＞

- ・導入で子どもたちがぐっと引き付けられた。
- ・たくさんのつますきの要因の視点から、授業が工夫されていた。
- ・全体的にどの子も参加できる授業になっていた。
- ・丁寧な掲示物があり、学習の手助けになっていた。

感動したことが2つ

- ・「2とびちょっとわからん」とつぶやいていた。わからないことが、わからないと言える学級の雰囲気がある。
- ・支援対象の児童が「家でやってみよ！」と嬉しそうに言い、隣で聞いていた子もにこっとしていた。

＜学力フォローアップ校事業について＞

- ・学力フォローアップとは、児童の学力向上、指導者の指導力向上が大事である。
- ・学びに向かう姿勢や学び合いのできる学級づくりが大切である。

●つますきの要因分析について

March 10, 2020

- ・児童のつまずきの要因分析が深く、多面的に見ることができている。算数の授業であっても、国語のつまずきなどからも分析している。廿日市市のユニバーサルデザインもベースにある。
- ・何ができて何ができていないかしっかり把握されていることによって、手だてが具体化されている。このようにたくさんの要因・手だてを出している学校はない。

●教科の指導事項から

- ・「おなじかずずつ」は今後の指導において、非常に大事な単元である。
- ・現行の学習指導要領では、算数的活動「具体物をまとめて数えたり等分したりし、それを整理して表す活動」、本時では、具体物をまとめて数える活動。次時は、同じ数ずつわけの活動。新学習指導要領では、知識及び技能として「具体物をまとめて数えたり等分したりして整理し、表すこと」となっており、一つの数を同じ数のまとまりとしてみることは、乗法や除法の素地になるので、とても大切な単元である。

●教科の系統性から

- ・第3学年 わり算の意味…△わり算の意味が理解できない
第2学年 かけ算…△「1つ分の数」「いくつ分の数」が分からない につながってくる。
- ・単元の系統性について、とてもよく整理されていた。
- ・最終的に児童は、何ができるようになればよいか、どこまでをねらいとするのかを明確にしておくことが大事である。本時では、大事なことは1つ1つ丁寧に抑えられていた。

●学習指導案について

- ・事前の想定と授業の見取りが大事である。つまずいていないか見取り、必要な手立てによる支援を行う。
※授業で、できていないのであれば、授業を止めてでもさせることが必要である。
 - ・学習指導案では本時に何をするのか、「具体的にこんな手だてをする」ということを記入するとよい。
 - ・本時では、どうするのか、意図的指名をするのなら、細かいところも指導案に書くべき。
 - ・学力を高めていくことが目標である。習得させたい内容を焦点化するために、時間配分の工夫をする必要がある。
 - ・教科の指導事項を見極め、つけたい力を明確にする。
 - ・児童のつまずきの要因分析を、指導事項をもとに焦点化する。
- #### ●今後へ向けて
- ・手立てによる効果の検証をしっかり行う。
 - ・「つまずきを自分で乗り越える学び」を児童にさせるために、わかった、できた！を大事する。

